

令和4年度(第73回)芸術選奨  
文部科学大臣賞 贈賞理由

## 令和4年度(第73回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	尾上 菊之助	古典、新作の両方で近年の活躍は目覚ましい。令和4年は尾上菊五郎家の芸である舞踊「土蜘蛛」、時代物の大作「盛綱陣屋」の盛綱で優れた演技を見せた。成果が顕著だったのが十月国立劇場の「義経千本桜」。岳父中村吉右衛門に学んだ平知盛、父菊五郎の教えを受けたいがみの権太と佐藤忠信実は源九郎狐という立役(たちやく)の大役三役を的確に演じ分けた。優れた資質に加えて芸への真摯さも備えており、今後への期待は大きく、顕彰するにふさわしい。
演劇	段田 安則	硬軟自在、常に我欲や力みとは無縁の自然体で作品に向き合う。その姿勢は、自ら演出も担った「女の一生」はもとより、従来のリアリズム演出とはかなり異なる「セールスマンの死」においても、揺らぐことがなかった。現実と幻想が混在し、自負と焦燥、愛憐(れん)と激昂(こう)など感情の振り幅も烈(はげ)しい。観客を、そんな崩壊寸前の主人公の脳内を巡る旅へと無理なく導いてみせた。融通無碍(げ)にして、一挙手一投足に説得力が滲(にじ)む名演だった。
映画	尾上 克郎	学生時代の8ミリ自主映画作品出演をきっかけに、美術部はじめ様々な映画制作現場を体験してきた尾上克郎氏のキャリアは40年を超える。矢島信男氏創設の「特撮研究所」に所属以来、先人たちの残した特撮技術と、現代の最先端映像合成技術を駆使し、映画の可能性を拓(ひら)き、豊かに実らせるその技は、「シン・ウルトラマン」でも大いに発揮された。全スタッフが知恵と力をあわせて創り上げる「映画」への敬意と「技術」への挑戦、後進への継承の熱意に打たれる。
映画	宮本 まさ江	時代劇から現代劇まで、その作品に適した寄り添い方で、繊細かつ大胆に世界観の構築に寄与する衣装。それを実現させる手腕が文部科学大臣賞にふさわしいと評価した。 令和4年の対象作品の一つ「キングダム2 遥かなる大地へ」の衣装は、特に複雑な表現力で作品に貢献した。兵士に土地の色の甲冑(ちゆう) (衣装)を着せることで時代の大きなうねりを、主人公の信と一匹狼の剣士・羌痾(きょう)に白を纏(まと)わせることで未知数だが世界をけん引する存在に成りうる力を感じさせた。 映画・映像分野の衣装、第一人者にして、時に自ら素材探しから始める作品世界を第一にする姿勢。衣装だからこそその表現を創作し続けている。
音楽	児玉 桃	メシアン音楽を様々な側面から徹底的に学んだ児玉桃氏は、彼の作品を機会あるごとに演奏し、メシアン未亡人であるイヴォンヌ・ロリオにも絶賛された。2022年はそのメシアンの没後30年に当たっており、その節目に「幼子イエスに注ぐ20のまなざし」を始め、メシアンの代表的作品を3日にわたって演奏するメシアン・プロジェクトを展開した。メシアンの作品が自らの身体の一部であるかのように血肉化した説得力に満ちた演奏は、今や世界有数といっても良いほどの完成度の高さをもち、改めて氏のライフワークとしてのメシアン解釈の比類のなさを印象付けるものとなった。
音楽	山登 松和	江戸時代後期に誕生した山田流箏(そう)曲では、ドラマティックな大曲から江戸っ子の情趣を凝縮した小品まで、硬軟併せ持った表現が求められる。「山登松和の会」は、山登松和氏が追求してきた「素の響きの美しさ」を具現し、山田流箏(そう)曲の多層性に富む魅力を際立たせた。特に組歌「四季曲」の透明感あふれる演奏は心に残る。このほか「根曳の松」の力強く華やかな箏(こと)の響き、小品で示された間の良さと精妙な声の表現も忘れ難い。山田流箏(そう)曲家としての実力と真価を示した年となった。
舞踊	志田 真木	令和4年は、コロナ禍の治まらぬ中での困難な舞台制作だったが、そんな中であつても目に立った舞台が、セルリアンタワー能楽堂における「琉(りゅう)球舞踊真木の会」で、ことに「伊野波節」「黒髪」は出色の出来だった。「伊野波節」は琉(りゅう)球伝統舞踊の珠玉の名作。女の激しく燃え上がる情念を極めてゆったりとした動きに収斂(れん)して心で踊る所作は演者の成長を見せつけ、本條秀太郎作曲・演奏になる「黒髪」は地唄とは違った新境地を表現して成功した。
舞踊	福岡 雄大	福岡雄大氏は、数々の国際コンクールで受賞後、平成21年新国立劇場バレエ団に入団、以後華麗なテクニックと豊かな表現力で古典バレエから近代バレエ、コンテンポラリー作品まで、主演を続け成果を上げてきた。令和4年も古典バレエでの成功のみならず、平山素子、柳本雅寛版「春の祭典」では2台のピアノと男女二人のダンサーという小人数の空間構成で、ストラヴィンスキーの難曲に拮(きつ)抗し、二つの肉体と精神が交差し、人間の根源的かつ壮大な世界観を描ききったことは大いに評価できる。

## 令和4年度(第73回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
文学	滝口 悠生	第二次世界大戦の激戦地であり、2万人を超える日本軍の戦死者が出た硫黄島は、今では自衛隊の基地が置かれ、民間人の立ち入りはできない。滝口悠生氏の「水平線」は、幻想性と日常性を巧みに縷(な)い交ぜる手法を用いて、その大戦当時と現在、そして島と内地という時空間をつなぎながら、物理的にはアクセス不可能な硫黄島に小説的想像力でアクセスしようとする大胆な試みであり、マジック・リアリズム的で濃密な小説空間を創出した、近年の日本文学における大きな収穫である。
文学	渡辺 松男	「土佐の牧野植物園へ飛ばしたり日差しとなりてわたしのからだ」「閉ぢられてある鏡にて白鳥は漆黒の夜をわたりの途中」など400首を収めた、渡辺松男氏の歌集「牧野植物園」は、生活風景から宇宙の神秘をたぐり寄せる。奔放にして特異な想像力はこの歌集で一段と研ぎ澄まされ、生命世界への先進的な視点を創り出すことになった。その文学性と精神性の高さは現代詩歌の一つの極点を示すものであり、芸術選奨の授賞対象にふさわしい。
美術	栗林 隆	栗林隆氏の作品は常に、造形的な完成度は高くセンシティブで、徹底したリサーチと行動力に裏打ちされた思考と社会批評精神の結晶であり続けている。2022年夏にドイツで開催された「ドクメンタ フィフティーン」において、シネマキャラバンと共に発表した「元気炉四号機」は、氏が定期的に行ってきた福島第一原発の形を模した体験型スチーム作品だ。人間のエネルギーの根源はあらゆる感情から湧き上がる元気を由来と考え、原発のエネルギーと重ね合わせ、誰もが裸で体感できる作品にした。 本作は、展覧会全体に向けられたネガティブな騒ぎの渦中でも、堂々と「ドクメンタ フィフティーン」の精神を象徴するオアシスであり続け、世界の美術愛好家らに歓迎された。
美術	沢村 澄子	沢村澄子氏は、書の流派に所属することなく、個展を中心として自己の表現を提示し続けている書家である。その作品は、自分にとって切実な言葉をいかに書くかという、言葉と書のせめぎあいの場に成立している。造形性と運動性を交差させ言葉を書きつける表現は、この現代という時代に共鳴しあうステージに到達している。室内空間を出て、展示フィールドを屋外へと広げるなど、その表現の更なる拡張を続けている。切実な思いを吐露する作品群は、後進へも大きな影響を与えることと思う。
放送	藤本 有紀	藤本有紀氏は、これまでも日本の文化や歴史の魅力を豊かに伝えるドラマを多く手掛けてきた。連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」は、1925年から2025年までの100年を母娘孫の三代の主人公の物語で紡(つむ)ぎだし、個人史を日本の物語へと昇華させた大胆な作品である。日々の暮らしと日本の歴史の繋(つな)がり、海外文化や国際社会への眼差し、メディアの変遷史などを重層的に描きだす、その確かな描写と物語の構築を評価したい。
大衆芸能	二代目 京山 幸枝若	師匠で実父の初代京山幸枝若の芸を継承し、「侠客伝」や「名人物語」などのお家芸に磨きをかけて新たな生命を吹き込んだ。とりわけ上方浪曲のホームグラウンド「一心寺門前浪曲寄席」のトリで演じた「天保水滸伝・笹川の花会」と「寛永三馬術・曲垣と度々平」は、愉快、痛快、弾むような名調子で、古き良き浪曲の魅力を令和の観客に存分に伝えた。体調を崩して精彩を欠く時期もあったが、60代後半からの充実ぶりは目覚ましく、今正に「第二の円熟期」を迎えている。
大衆芸能	鈴木 慶一	現存する日本最古のロック・バンド、ムーンライダーズの中心メンバーとして、高橋幸宏氏と組んだTHE BEATNIKSやKERAと組んだNo Lie-Senseなど多彩な音楽ユニットの一員として、プロデューサー／ソングライターとして、更にはCM音楽、映画音楽、ゲーム音楽のクリエイターとして、幅広い分野での活動が内外で高く評価される鈴木慶一氏。1970年頃にプロ音楽家として歩み始めてから半世紀を経た今、時代時代の最先端の感触をいち早くシーンへもたらし続ける彼の功績を改めて評価したい。

## 令和4年度(第73回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	唐津 絵理	唐津絵理氏は、公共劇場でプロデューサーとして活動を行い、さらに令和2年に民間支援による新しいダンスハウス「Dance Base Yokohama」の立ち上げに参画、これらの連携の成果として令和4年は「愛知県芸術劇場×Dance Base Yokohama パフォーミングアーツ・セレクション2022」の全国ツアーを行い、ダンスの多様性を示し高く評価された。氏は、アーティストの自立的な活動を支援し、可能性を引き出すために、安全安心な制作環境を整えようと活動を始めた。また創客の視点から、舞台芸術の批評眼を持った新たな観客を生み出すことにも力を入れてきた。これらの活動は芸術振興の意味や方法を改めて問い直す契機ともなった。ダンスに止まらない芸術の創造と振興・支援施策のあり方両面に影響を与える重要な取り組みを牽引してきた存在である。
評論等	岡塚 章子	小川一眞は日本近代写真の大立者と言ってよい。千円札に使われた夏目漱石の肖像がその写真館で撮影されたように、米国仕込みの腕を持つ営業写真師だったが、のみならず、国家的な文化財調査や明治天皇の葬儀の撮影を担い、先駆的な構想と幅広い人脈によって多様な印刷・出版事業を展開した。岡塚章子氏は美術館学芸員として小川と出会い、30年余の堅実な調査を通じ、業績の全容を解明した。重要な基礎文献となることは確実で、表現論だけでは捉えがたい写真史の本質を示唆する業績でもある。
評論等	中野 正昭	日本近代のオペラ史を音楽から論じようとする、演目の軽重や歌唱・演奏の水準ばかりが問題とされがちだ。大正よりも昭和にレベルが上がるというような発展史観ともつながりやすい。しかし、オペラは飽くまで音楽と演劇と舞踊との交点で営まれる興行であり、その時代の観客の感性や欲求と触れ合っこそ。優れた演劇史家、中野正昭氏は、そこを確実に捕まえている。大正期の東京ならではの唯一無二の文化現象としてのオペラの姿を、新資料も駆使し、特に上演台本を丹念に読み解いて、見事に描き出した。本書には大正の独自の輝きが宿っている。視点と内容の両面で歴史を塗り替える傑出した業績だ。
メディア芸術	新海 誠	「すずめの戸締まり」は、公開されるや否や大ヒットを記録し、正に国民的映画として広く人々の支持を得た。東日本大震災を扱ったこの作品は、「君の名は。」「天気の子」に続き、新海誠氏の災害を扱った3部作とも呼ばれ、そのスケールの大きさとダイナミックな物語展開により我々を圧倒する。宮崎、愛媛、神戸、東京、そして東北へと続くロードムービーは、日本の地方の美しさと過ぎ去った時代への慈しみにあふれており、大切な人を取り戻そうとする一人の女子高生の抵抗が、より大自然の大きさと無情さを感じさせる。日本の神話や伝承に基づく世界観を持ち、アニメーションによって「壮大な叙事詩」を描く氏のスタイルは唯一無二のものである。

令和4年度(第73回)芸術選奨  
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

## 令和4年度(第73回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	枝元 萌	「あつい胸さわぎ」は、芸大生になった娘とシングルマザーの母の前に二人の男性が現れ、それぞれ胸の高鳴りを覚える中、娘に病気が見つかって、という母娘の物語。枝元萌氏は一人の女性として娘を思う母の愛情を情感豊かに表現。関西弁でつづられた台詞の軽妙なやり取りの中に丁寧に気持ちを落とし込んだ。舞台を和ませる雰囲気。氏自身のキャラクターも魅力的で、物語の貴重なパイプレーターとして活躍が期待できる存在である。
映画	早川 千絵	「自助」「自己責任」といった言葉がはびこり、人間を「生産性」の観点から評価して弱者を切り捨てる社会を、早川千絵氏は長編映画監督第1作の「PLAN 75」で静かに、しかし鋭く批判した。75歳になると安楽死を選べる制度「プラン 75」が導入された近未来の日本を舞台に、制度に関わる人々の日常を丹念に描く。セリフで多くを語らず映像で情感を繊細に表現し、社会問題を娯楽作品のなかに織り込んだ力量は、今後の活躍を大いに期待させる。
音楽	園田 隆一郎	園田隆一郎氏は、声楽から音楽全体を構築していくわざを熟知した、イタリア・オペラが本格的に指揮できる数少ない日本の指揮者である。令和4年は大阪・フェスティバルホールにおけるロッシーニ「泥棒かきさぎ」及びびわ湖ホールにおけるヴェルディ「ファルスタッフ」という二つの大作を成功に導き、同時に藤沢市民オペラのヴェルディ「ナブッコ」においても見事な演奏を見せた。イタリア・オペラの伝道師としての今後のますますの活躍が期待される。
舞踊	田村 一行	田村一行氏は、大駱駝艦(だいらくだかん)で磨赤兒氏に師事し舞踏家として活動を始めた。振付・演出に早くから挑戦するほか、他ジャンルとの共演、民俗芸能の採集、子供ワークショップなど舞踊の可能性を探求し続けている。令和4年、振付・演出・美術・出演した「舞踏 天狗藝術論」では、これまでの成果を活(い)かした豊かな世界観を、緻密にして大胆な構想と振付によって創り上げた。舞踏だけでなく舞踊界を牽(けん)引する一人となることが期待される。
文学	九段 理江	九段理江氏は「Schoolgirl」で、太宰治の「女生徒」のリメイクを偽装しながら、今もなお踏襲され続けている母と娘の対立という古典的なテーマの換骨奪胎を図った。母と娘の対立は、迷信や無知との戦いでもあり、影響の不安をめぐる感情的軋轢(あつれき)でもあるので、父と息子における思想的対立のように単純には解決できないが、世代間ギャップの紋切り型への批評や微笑を誘う皮肉を織り交ぜ、AIまで登場させ、このテーマの新機軸を打ち出した。
美術	中崎 透	中崎透氏は絵画に始まり、自作の看板や陶芸、ことば、映像から既製品の転用に至るまで極めて多角的な視点を作品に落とし込む。契約行為と共に看板を制作展示した当初から、アートの社会性、人との繋(つな)がり、ものが生まれ消え再生する過程を拾い続ける。Nadegata Instant Partyの一員として活動する一方で、令和4年は個人での複数の発表が際立った。地元水戸芸術館の個展では、地域住民から集めたオーラルヒストリーを看板やネオン、過去の日常の断片と共に展示、それらの存在理由と価値の変容を提示した。一地域の個人的物語が、地方都市の画一的既視感を呼び覚ます。彼の捉えどころのない多様性は何より現代美術の特質を表している。
放送	佐野 亜裕美	佐野亜裕美氏はテレビプロデューサーとして、「カルテット」、「大豆田とわ子と三人の元夫」、「17才の帝国」など、既存のスタイルに囚(とら)われぬ新しいドラマを生み出してきた。「エルピス—希望、あるいは災い—」では脚本家・渡辺あや氏と組んで冤(えん)罪事件を取り上げ、臆することなく権力の腐敗やテレビ報道の在り方にメスを入れた。それを正義の側から一方的に告発するのではなく、心の闇や嘔(おう)吐する身体といった登場人物の弱さの克服とともに描いた点も高く評価された。
大衆芸能	東京03 (飯塚 悟志) (角田 晃広) (豊本 明長)	洗練された脚本と卓越した演技力により、日常に潜むちょっとした違和感を笑いに変えるコトは、演芸と演劇の区別がつかない独自の境地を切り開き、エンターテインメントとしてのコトの存在価値を確かなものにした。令和4年、9都市34公演の全国ツアー「やな覚悟」で圧巻の観客動員数を誇るなど、ライブ中心の活動形態を完成させた功績も大きい。絶妙な人間心理を表現する三者三様の存在感は、演者が人生経験を積むほどに魅力を増しており、今後更にコトの可能性を高めてくれることを期待したい。

## 令和4年度(第73回)芸術選奨 贈賞理由一覧

【文部科学大臣新人賞】

部門	受賞者名	贈賞理由
芸術振興	平塚 千穂子	「バリアフリー」という言葉をあえて使わず、全ての人のための映画館「ユニバーサルシアター」と銘打った「CINEMA Chupki TABATA」を平成28年に立ち上げ、そして令和4年、映画「こころの通訳者たち」を制作。そこでは、舞台手話通訳者、音声ガイド制作者、そして障害を持つ当事者らの奮闘が描かれる。その根底にあるのは、障害の有無に関係なく一緒に芸術を楽しむという姿勢である。地域へも波及するその活動が更に発展されることを期待し、文部科学大臣新人賞を贈る。
評論等	佐藤 未央子	谷崎と映画の関係をめぐる研究はこれまでも多数あったが、本書はそれら先行研究をしっかりと踏まえた上で資料を丁寧に精査しつつ、谷崎にとって映画とは何だったのかという根本的な問いを掘り下げ、実にスリリングな考察となっている。何より、谷崎の文章に立ち返りたい思いを読者に搔(か)き立てる巧みな筆致が秀逸である。谷崎の「視座」に立たんとする筆者の目論見(もくろみ)には才知が溢(あふ)れ、分析力のみならず批評眼も鋭い。更なる成果が続くことを予感させる。
メディア芸術	野田 サトル	野田サトル氏の「ゴールデンカムイ」は令和4年大好評の末8年に及ぶ連載を完結した。この作品は明治末期の北海道と樺太を舞台に、国・民族・個人・様々なレイヤーが複雑に重なる、スケールとスピードを兼ね備えた稀(け)有な作品であった。特に敵味方が入り乱れる多彩なキャラクターと物語の要所に散りばめられる異文化の描写は多くの読者を魅了した。今後とも様々な歴史からの新たな物語の生成を期待して文部科学大臣新人賞としたい。